20231015 レムナント教会 1 部

条件と関係なく（マルコ 12:38-44）

世の中の人々は、そして残念なのは信者でも神様の祝福が人間の条件に左右されるというふうに思う傾向があります。また、信者が献身をすることも条件によるものだと思う傾向があります。でも今日そのことに対して素直に、果たして本当にそうなのかと問いかけつつ、答えをいただきたいと思います。今日の聖書の箇所には、律法学者を叱る場面と献金を捧げたやめもを褒められることが紹介されています。これを通してみなが当たり前に条件によって、また条件に左右されると思っていますが、イエス様はそのような考え方は違うよと叱りつつ、そうではないんだと教える場面です。まず律法学者を叱りつつ、そこを通してイエス様が私たちに語っていらっしゃるメッセージはこのようなメッセージです。

1. 人間的条件と関係なく、キリストある者が祝福の人

人間的な条件と全く関係なく、キリストある者が祝福の人なんだということを語っていらっしゃる場面です。

1）律法学者たちの行為の裏にある意識

今日の聖書を見ますと、律法学者たちの行為について紹介されています。みなが見ている中でお祈りを捧げて、あの人は結構、祈っている人なんだと見られること、またどこかに行きますと上の席に座ること、待遇されることなどをとても好きな人なんだということをおっしゃいました。そのようなことを気をつけなさいとイエス様が警戒をしていらっしゃいます。この律法学者たちがとっている行動は、ただの人気集めのための行為ではありません。うっかりしますとみっともないなあとつい思うかもしれません。でも、この律法学者たちがそのように目立つようになり、また待遇されようとしている行動の裏には、彼らにこのような意識があるからなのです。単に道徳的に、また人間的にみっともないのか、かっこいいのかという話ではありません。律法学者たちは、ほかの人より自分は偉くて優れていると自負しています。その理由がほかの人より学識があるし、また社会的な地位を手に入れているし、今やっている仕事の内容が聖書を教える仕事なのです。等々いろいろな人間的な条件を見たときに、ほかの人よりずっと良い条件、優れている条件を持っているので、だから私はあなたがたより祝福されたものなんだという自負と、そういう意識を持っていたのです。それが行動としてそのように現れているということなのです。たしかにそういう風に思うのも無理はないかもしれません。人間的に条件的にほかの人と違ってたくさん恵まれている状況を持ってれば私は祝福されているし、ほかの人より優れているとついつい思うかもしれません。でもイエス様はそのような意識が勘違いであり間違いなんだと非常に怒って叱っていらっしゃるのです。それほどそれが悪いのでしょうか。問題はそのような意識を持っている限り、つまり人間的な条件によって祝福が左右されるというふうに思っている限り、たとえ教会に通っているにしても、そこにキリストが入る余地がなくなります。キリストはいりません。税金を整えて良い条件をもっていれば、それで祝福だと思うのであれば、そこにキリストなどが入る余地はないのではないでしょうか。もう祝福されているのだから。また、そうでない人々は、私もあのようになりたいな。あのようになることが祝福されることなんだと思って、そちらの方向に向かうようになるでしょう。それはある意味、非常に悪なことになりがちなのです。なぜ律法学者たちは自分がほかの人より条件の面において優れて恵まれているということで、それが祝福されたと思うのでしょうか。律法学者だけの話ではありません。

2）人の根本に対する無知と無視（エペソ 2:1-3、ルカ 18:10-14）

それは何回も繰り返して皆さんに申し上げているように、人の根本が何かに対して無知であり、それを聞いたとしても無視するからなのです。エペソ 2：1-3 には、それが一番よく分かるように紹介されています。人間というのは条件的にいくら優れたとしても、自分の罪と罪過の中で死んでいた者なのです。だから仕方がなく自分が選択するのではなくて、自動的に空中の経緯を持つ悪魔サタンに従うしかありません。つまり、悪魔サタンの奴隷として生きるしかありません。どんなにすごい条件に恵まれていたとしても。だから生まれながら神の御怒りを受ける子として生まれる、つまり滅びの運命、地獄の運命を生まれた時から抱えて生まれるものが人間なのです。それが人間の根本なのです。それを知らないので人間的な条件によって祝福を

天秤にかけるわけです。別にそのように思うことが道徳的に非常に悪いんだという意味ではありません。キリストが入る余地がなくなる、そこが一番の問題なのです。同じ内容がルカ 18：10-14 にも紹介されています。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは取税人であった」。指差されていた取税人であった。「パリサイ人は、立って、心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを、感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」と祈っていました。この取税人やほかの人と私は違うよと。「ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようともせず、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』あなたがたに言うが、この人が、義と認められて家に帰りました。パリサイ人ではありません。なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです」。自分が条件によって評価した場合にはダメになるよ。でも自分を低くする者、条件がどうであれ自分は神の恵みが必要な者、救いが必要な者だ。これが低くなるということです。だからキリストでなければいけませんと言う人は義と認められると言われています。

3）気をつけなさい！
だからイエス様は非常に厳しい口調でこのような律法学者、その行為や意識というものに気をつけなさいとおっしゃいました。イエス様は世にいらっしゃる時に、貧しい人、病気の人、失敗している人間、遊女、売国者、指さされる人、疎外されている群れと交わり食事をしたりしていました。それは貧しいから祝福されるという意味ではありません。パリサイ人や律法学者たちがそのように条件によって祝福が左右されるかのように思い、また教えて、みながそういう思いでいるので、それはそうじゃないよということを示すためにイエス様は条件的に恵まれていない人々と交わりをし、一緒に食事をしたりしていたわけです。それがメッセージなのです。

4）条件と関係なく、キリストある者にある祝福
まとめて申し上げると、条件がどうであれ、キリストある者が祝福された者です。学識あるから、金持ちだから祝福から例外になるわけでもありません。条件がどうであれ、その条件によってではなくて、キリストがある者が祝福されたものなのです。そして、キリストある者は、たとえこの律法学者のような条件を持っていなくてもキリストある者は、イエス様がおっしゃったように天の御国があなたのものですと祝福されているわけです。死と罪の原理から完全に解放されているこの祝福がその人のものなのです。その人が律法学者であれ、あるいは遊女であれ、その条件と関係なくキリストある者はこのような祝福の主人公なのです。いくら努力してもお金を払っても得ることができない神から与えられるいのちを所有することになります。しかも誰の奪うことができないので、永遠のいのちの所有者となります。だから当然、地上のすべてに打ち勝つことができる、すべてを超越することができる御座の祝福がその人のものであり、この地上を旅人として歩き、天の御国、天国を希望にして歩くものになります。だから、何ものにも縛られること、囚われること、執着、未練などを持たないで巡礼者の道を歩くことができる、そういう祝福を頂いているものがキリストある者なのです。キリストの他にはこのような祝福はまったく得られません。律法学者たちが自分は祝福されたと自負しているその条件が 1000 倍、上乗せされたとしてもキリストにあるこの祝福とは無縁なのです。人間の根本が何かを知らないこと、それを無視することがどれほど愚かなことで、どれほど不幸なことで、どれほど悲しいことなのかということをイエス様はあえて律法学者を取り上げて弟子たちに教えていらっしゃいます。みな今までは律法学者は祝福されたんだ。えらいんだ。私たちもああいう風にならなきゃ。私たちは足元にも及ばない。なんと惨めな人間なのか、と思うのが当たり前だったわけです。だからイエス様はここで律法学者の行為、その行動を取り上げて、何が祝福なのか、神様に祝福された人はどのような人間なのかについて教えていらっしゃいました。

　それからもう一つ、やもめがほかの人が見たときには本当にわずかな小さい献金を捧げました。それなのにイエス様は「今、この献金箱に献金を入れた人々の中でやもめが一番多く入れたんだよ」と不思議なことをおっしゃいます。それを通して私たちにこのようなメッセージを語っていらっしゃいます。

2. 人間的条件と関係なく、救いの価値を喜ぶ人が献身する。

人間的な条件と全く関係なく、救いの価値が何か分かって、それを喜ぶ人が献身できるよと。神様を喜ばせる、また神様に用いられる献身、これこそが信者の最高の祝福なのです。知らない人が見ると犠牲のように思われるかもしれません。とんでもありません。

1）やもめの献金
今やめは自分の全財産を注ぎました。ほかの人が見たときには大した金額ではありませんけれども、それはどのようなモチベーションでそうしたのでしょうか。何が彼女をそのように駆り立てて、献身の実として自分を捧げるようにしたのでしょうか。ほかのなにかでは不可能です。救いの価値が何か分かって、それを喜んでいたのでこれが可能だったわけです。多くの人がこのやもめの献金をイエス様が褒められたことに対して、額が少なくても心込めて精一杯捧げれば神様が喜ばれる。どんなにたくさん捧げたとしてもその誠意と心を込めていないと神様に喜ばれない、と解釈します。それから、献金をあまりしたくない人の少ない金額を正当化するところにこれを使う場合もあるわけです。今この献金の話はそのような次元の話ではありません。もちろん、心をこめて信仰を込めて捧げないといけないでしょうけれども、単純にそのような道徳的なお話ではありません。

2）イスラエルの信仰の状態
このやもめの献金をイエス様が褒められたことを理解するためには、当時のイスラエルの信仰の状態を理解しないといけません。当時のイスラエルは一生懸命いろいろな儀式を守ってルールを守っていたにもかかわらず、キリストが全く分かっていない状態でした。だから、救いが何かも分かっていません。福音が途絶えている状態です。そのような状態のまま宗教的な行為が一生懸命行われていたわけです。その流れの中で今、献金を捧げているわけです。キリストも知らない、救いも分かっていない、福音の意味も価値も分かっていないまま捧げる献金は宗教的な行為です。分かりますか。そのような中でやもめはここに詳細は書いていないけれども、自分の全財産、明日食べ物に困ってそのまま飢え死になるかもしれない状態で、額は少ないけれども彼女にとってはそれは全部なのです。それを捧げたということは宗教的な行為ではありません。聖書に書いてある人間が神様に罪を犯してダメになり、神様はその人間を愛して憐れんで人を救うことを約束されました。それを福音と言います。彼女はその内容を知っているわけです。それで女の子孫が生まれて、蛇の頭を踏み砕く。その女の子孫キリストを神様は約束された。そのキリストの契約、そこにのみ希望があるということが分かっていて、そこにある神の愛が何か分かって、その価値が分かっていたがゆえに、その喜びと感謝のゆえに捧げたわけです。そうでないと彼女もこの献金は理解できません。額の問題はでなくて彼女のすべてを捧げました。たぶん、彼女がキリストのために自分の命を捧げるような場面だったならば、たぶん命も惜しまずに捧げたでしょう。イスラエルがこのような真っ暗な状態の中で不思議なことなのですが、みなに指さされて、当時、やもめというのは神に呪われたのでやもめになったという認識があった時代なのです。そういう彼女が珍しく福音が何か、救いが何かということが分かっていたからこのような献身の行動に出ることができたということでしょう。

3）条件(やもめ)に縛られることなく
やもめというのは、先ほども申し上げましたように、人間的な条件で見るとものすごく劣っているみじめな条件です。だからこそ私のような人間に何ができるかと思うのは普通なのです。勉強もあまりできないし、お金もあまりないし、才能もないし、今こんなに険しい状況だし、バックグラウンドもあまりないしといろいろな条件を取り上げて、私たちはだから献身など今は無理です。もう少し条件が整ったらその時に献金します。その時に奉仕をしますよ。その時に伝道しますよという話はよくよくしているのではないでしょうか。それはもはや献身ではありません。献身の本当の意味、律法学者を通しては祝福も本当の意味、やもめを通しては献身の本当の意味が何かを私たちに教えていらっしゃるんですね。やもめという最悪の条件なのに、その条件に縛られることなく、ほかの人にはできない喜びの献身ができたということなのです。

4）献身への条件つきや言い訳などない
つまり、神様に対しての献身というものには条件付きということはありません。条件がこうだから、条件がこうなれば献身できますということはもはや献身には当てはまりません。献身のことを正しく理解しましょう。だから献身に対しては言い訳などもありません。今日のやもめ、彼女の献身のことは、数字とか人間

的な常識などでは説明できない、計算できない、そういう内容なのです。それが献身というものです。つまり、ほかの人が見たときには少ない額でしょうけれども、それは彼女のすべてでした。いのちがそこに込められていた、そういう献身なのです。これこそが信者の特権です。なぜでしょうか。救われたのだから。いのちある者だから。今死んでも天国に迎え入れられるように保障されているし、この地上にいる理由が神のみこころ、福音宣教、暗闇の力が砕かれて、死んでいるたましいが助かる、世の中のなにものでも不可能なそのことのために捧げられ用いられるということは献身なので、何と素晴らしい特権でしょうか。これがクリスチャンに許されている特権なのです。なのに、ほとんどのクリスチャンが救いの価値と喜びに、本当にその人のすべてが囚われるようなことがないのでいちいち文句が多いのです。私は個人的にそう思います。教会でそのような献身の機会が許された時に、負担に思ったり文句が出そうな方々はやめてください。それはもう献身ではないから。より救いの祝福を深く黙想してそれに染まっていくそのプロセスが求められます。献身の前に。多くを持っているから捧げられるわけではありません。少ないから捧げられないわけでもありません。献身はそういうものではありません。これを通してイエス様は信者の私たちがやもめ以外の人のような宗教的な行為ではなくて、やもめのような献身の喜びの人生を歩いて来なさいということを弟子たちに向かって、今の私たちに向かって語っていらっしゃる場面であります。

話をまとめましょう。なので私たちはこのようなイエス様のメッセージ、教訓をしっかり心に留めて、人間的な条件で祝福を天秤にかけること、そのような真似はやめなければいけません。ついつい条件で祝福を論ずるわけですが、それは愚かなことです。ただキリストだけを条件にして、堂々と「私は祝福の人なんだ。私は神様に祝福されたんだ。天にあるすべての祝福が私のものなんだ」と宣言するそのような信者になりましょう。それから、信者として献身というのは神様から許されてるほかの誰にもない特権なのです。誰が献身できるのでしょうか。救われていない人が。教会に通っていても救いの価値と祝福と、それに対する感謝と感激がない人は、献身とは無縁な人生を歩きます。それは本当に無駄な悲しい人生になります。なので献身も人間的な条件で天秤にかけるような真似はこれからやめましょう。私のすべて命でさえ惜しまずに捧げられる救いの価値を黙想して、感謝することに集中しましょう。パウロは言いました。私のいのちはこれっぽっちも惜しまない。福音宣教のために、教会のために、次世代が地の果てにまで、主が来られるまで福音宣教ずっと引き継いで行っていくことのためにであれば、命などは惜しまないよと。これが特徴なのです。献身をして神様に用いられた信仰者の特徴です。誰かが無理やり強要するからこれができるというものでもないし、できるわけでもありません。献身はそういうものではありません。

もう一度言います。たぶん来年から本格的に三つの庭のために私たちは祈りつつ神様に答えられて、そのおあかしとして献身をしていかないといけないと思いますが、今から申し上げておきますが、心から負担に思ったり、いやいやな思いがあったり、文句の気持ちがあったりする場合には行動しないで、救いの祝福を黙想してください。福音宣教がどんなものなのか。次世代をどのように立てていくべきなのか。そのために教会がどのような教会になるべきなのか。教会がどれほど大切なのかということを学ぶ機会にしないといけません。それで心から本当に感謝して喜びがあればその分祈り、神様答えられた分、捧げるようになればいいのではないでしょうか。福音宣教のために喜んで献身する素敵な信者になりましょう。私たちには感謝のことに柳先生を通して福音宣教のために具体的に何にフォーカスを合わせて献身すべきなのかを教えられているので、漠然とした内容もありません。237、癒し、サミットに方向を合わせて献身するわけです。そのために教会には三つの庭が求められます。だから献身するわけです。そのために献身する人の名前がローマの手紙 16 章に書かれています。そのためにひとりひとりに裏面契約を発見するから献身するわけです。そのような献身の喜びの信者として、神様このように導かれて答えられましたというおあかしができるようになることを祈っていきたいと思います。

最後にもう一度言います。人間的な条件と関係なく、キリストある者が祝福の人です。騙されないように。そして人間的な条件と関係なく、小さな子どもでも貧しい人間でもすごい学者でも金持ちでも関係なく、救いの価値が分かって喜び、感謝する人が献身できます。そこから生まれるものが本物の献身です。皆さんはキリスト・イエスは信じてすでに祝福された幸いな者なのです。だから、皆さんには喜びの献身ができる特権が許されていることを改めて感謝して、今週 1 週間勝利することを主の御名によって祈ります。

（祈り）
恵み深い父なる神様。ありがとうございますありがとうございます。人間的な条件などに左右されず、ただキリストによって私はいのちあり、祝福された幸せな幸いな者であることを忘れないで、堂々とすべての場面において宣言できる信者として整えてください。だからこそ、私にはこの世にいる間に一番価値ある福音宣教のために献身できるその特権が許されていることを覚えて感謝して、残りの生涯、素敵な献身の信者として歩いていけるようにひとりひとりを祝福してください。イエス・キリストの御名によってお祈りをいたします。アーメン